

博士論文全体の要約

論文題目：『中国青海省におけるチベット仏教復興運動下の民間信仰の変容に関する人類学的研究—同仁県ワッコル村を事例として—』

著者名：喬旦加布（地域文化学専攻）

内容の要約

本論文の目的は、近年、チベットのアムド地域の青海省一帯で見られるチベット仏教の復興運動と民間信仰の変容を対象とし、青海省黄南藏族自治州同仁県ワッコル村の事例から、それら宗教にかかわる変化の実態を明らかにし、考察することである。

中国政府は、1980年代以降の経済改革を契機に近代化を推し進め、急速なインフラ整備や観光開発、文化の資源化などを展開してきた。この経済発展の波は、2000年代以降現在まで中国各地域社会の文化、宗教、民族など人々の価値観や慣習、アイデンティティなど、隅々にまで影響を与えている。とりわけチベット・アムド地域では近年、チベット仏教の新たな展開が目立つ。なかでも本調査地であるワッコル村は、仏教復興運動下での民間信仰の変化が極めて著しい。筆者は儀礼こそ、現地社会の伝統的イデオロギーが最も反映される場として着目し、村社会内部から多角的に捉えることで、できる限りワッコル村社会の変化をリアルに描写した。その上で宗教信仰の変化にかかわる要因を解明しようとした。

この研究目的を達成するために、本論では、いくつかの文脈に着目した。1つは、中国における経済発展や観光開発並びに無形文化遺産の登録などの文化政策の変化という文脈である。また、一見、それらによって引き起こされたように見える村の儀礼実践における変化の根底には、この地域の歴史のなかで変動してきた民族に関わる状況、人々の民族的アイデンティティに関わる意識や感覚という別の文脈がある。本論文では、それらに十分、留意しながら、議論を進めた。

本論文は、全9章から構成され、序章ではまず、本研究の目的と本研究の位置付け、学術的意義、調査概況について述べた。近年のワッコル村社会における複雑な文化現象のプロセスの解明を、本論文の問題設定とし、本研究をチベット研究史の流れ、現代中国におけるチベットの民間信仰研究、土族研究の中で位置付けた。

第一章では、本研究の調査地であるワッコル村の地域概況を、フィールド調査で収集した地方史料、人々の語りなどを通して紹介した。具体的には、吐蕃から元、明、清代、中華人民共和国成立までの青海省、同仁県、ワッコル村の歴史並びにワッコル村の祖先や首領の歴史を概観する。これにより当村という場所が、通時的・共時的にチベット族やモンゴル族、漢族、トゥ族の人々と文化の交差点であることを論じた。

さらに第二章では、ワッコル村における多重的な民族名称の詳細に関して、多民族との関係から具体的に論述した。本研究で議論の中心となるドルドの複雑な位置付けを、歴史的に土族、チベット族、保安族などの多様な民族との歴史的社会的背景、具体的には言語や民族、移住の歴史から考察した。また、中国国家による民族識別と、当村の民族帰属意識の違

い及び、その複雑な実態を記述した。

続く第三章では、ウォッコル村の伝統的村落組織であるツォワと親族関係、現代的生産隊の構成、人々の主要な経済活動、宗教的实践に関して記述した。ウォッコル村の人々の日常生活が、いかに伝統的な村落組織や生業、経済活動と深く関わっているかを論じた。

第四章では、1980年代以降の経済発展や青蔵鉄道の開通、観光開発などに伴い、どのように生業や信仰が変容したのかを論じた。特に、2006年の中国非物質文化（無形文化財）の認定や2009年のユネスコ無形文化遺産の登録で、仏画制作といった農業以外の収入増加と、それに伴う村人の価値観の大きな変化を述べた。中国国内の文化遺産政策の下、県、州、省の各レベルにおいて当村のレプコン芸術に着目し始めた諸相を描写した。そして、中国の国家からさらには世界ユネスコにまでレプコン芸術が認定される中で、村社会内部の絵師を中心に、人々の職業観や経済観、宗教観などがいかに変化していったのかを論じた。

第五章では、インド帰りの高僧と知識人が村の政治・文化活動に参入し、その中でチベット仏教の復興運動の担い手となっている状況を詳細に論述した。2000年以降、人やモノ、情報の流動性が高まる中で、転生ラマや大学教授によるウォッコル村での訓話やボランティア組織の創設、インターネットメディアによる情報の拡散により、閉鎖的で伝統的な村社会が、いかにより多くの人々と情報を共有するようになったかを論じた。

第六章では、農業をめぐる年中行事とシャーマンの職能者などの宗教実践、具体的にはウォッコル村最大の儀礼であるルロ祭とフコン祭、日常的に行われる儀礼のツェト儀礼、ツェゴク儀礼、チュム儀礼、ニャンネ儀礼に関して厚く記述した。ルロ祭に関しては、当儀礼で使用される祭祀文サンペ、儀礼の主役であるハワやシャーマンの諸相について詳細に記述した。フコン祭に関しては儀礼のプロセスと共に、村人のフコン祭への解釈とその変容について論じた。日常生活に根差した儀礼の実践では、各儀礼の内容を詳細に論じた上で、村落共同体における年中行事が大きく変化していることを明らかにした。

さらに第七章では、年中行事における儀礼や日常生活に根差した儀礼の変化を受けて、個々人の人生儀礼の細部にも見られる変化を記述した。具体的には、ウォッコル村での誕生から死までの各儀礼を描写すると共に、このような儀礼に見られるチベット仏教や民間信仰と深く関わるアイデンティティの動態に関する考察へと展開した。そして、近年の儀礼の変容が、土族ではなく「チベット族」であろうとする人びとの強い民族アイデンティティの主張のあらわれであることを論じた。

以上を通して、本論文では、中国青海省におけるチベット仏教の復興運動と民間信仰の変容の全体像を描き出した。それを踏まえ、終章において、近年のウォッコル村においてチベット仏教復興運動の活発化が現地社会の民間信仰の変容と深く連動しており、土族ではなくチベット族であろうとする「ドルド」の曖昧で可変的な民族的帰属意識がそれらの変化に深く関わっていたと結論づけた。さらに同じ「ドルド」が居住する地域の中で、ウォッコル村においてチベット族であろうとする意識が突出している状況に対して、同村が周辺のドルド村落のどこよりも高僧や伝統医、知識人や大学進学者といった知識人を多く輩出して

おり、さらに漢族や漢語、漢文化と繋がりが極めて深い一方で、過去の歴史的経緯の中で、周辺のチベット族の村落との密接な関係が生じていたことが関係している可能性を指摘した。